

一八八三年十一月二十六日(月)

タクール、聖ラーマクリシュナ、シンドリヤ地区のブラフマ協会の礼拝集会  
に出席してヴィジヤイ・クリシュナ・ゴースワミーたちと語り合う

### 三昧境

カルティク月の黒分十一日目、キリスト暦一八八三年十一月二十六日。マニラル・マリックの家でシンドリヤ地区のブラフマ協会礼拝儀式が行われる。その家はチットプル通りに面していて、南の端にハリソン通りとの交差点があり、その交差点の北、サクロやピスタチオやリングを並べてある店から数軒隔てたところにある。儀式は大通りに面した二階の広間で執り行われる。今日の集会は年一回の儀式なので、マニラルは盛大な祝祭としての用意を整えている。

祭りの家は喜びに満ちあふれ、内も外もみずみずしい緑の葉を豊かにつけた木の枝や色とりどりの花や花輪で美しく飾ってある。家のなかでは会員たちが坐を組んで式の始まるのを待っている。全員が座に着くことが出来ないほどだ。西側のテラスのあたりをぶらついていたり、もう式場に並べてある木の長椅子に腰掛けている人もある。時々、この家の主人や親戚の人たちが招待客や会員たちのと

ころに来ては会話の中に入り、接待に心を配っている。夕方になるだいぶ前から、会員たちは来はじめたのである。彼等にとつて今日は、儀式のほかに特別期待していることがあるのだ——それは今日、聖ラーマクリシユナ大覚者様パラマハンササチーヴがここへいらつしやることである。プラフマ協会の指導者ケーシヤブ・センをはじめ、ヴィジャイ、シヴァナートなどの会員たちを大覚者様は大そう気に入つておられ、また彼等も、このお方を心から愛慕している。ハリの愛に酔つておられる様子、神聖な愛と燃えるような信仰、子供のようになつて神と語り、至聖かみを恋慕つて泣く様子、すべての女性を母と観て拜むこと、世俗の話を嫌つて油の流れるように絶え間なく神の話ばかりすること、すべての宗教は憎み合わずに互いに敬意をもつて接し仲良くしなければならぬという主張、神の信者を思い焦こがれて流す涙——これらすべてにプラフマ協会員たちは惹きつけられているのだ。だから、ずいぶん遠いところからも、この御方に一目会う機会を得るために集まつて来ていたのである。

〔シヴァナートと、眞実を語る〕こと〕

礼拝式の始まる前、聖ラーマクリシユナはヴィジャイ・クリシユナ・ゴースワミー氏やほかの会員たちと笑顔で語り合つていらつしやる。礼拝室には明かりがついていたので、もう間もなく式が始まることだろう。

大覚者様がおつしやつた。

「えーと、シヴァナートは来るかい？」

一人の会員が申し上げた。

「いえ、あの方は今日、大そう重要な用件がありますそれで、出席されません」  
大覚者様はまたおっしゃる。

「シヴァナートを見ると、わたしはとても嬉しくなるんだよ。あれはまるで、信仰の甘い水に浸りきっているような様子だからなあ。それに、あんなふうに大勢の人から尊敬される人間はきつと、神様から何かの力を与えられているんだ。でも彼には、大きな欠点が一つある。それはね、自分の言葉に責任を持たないことだ。わたしに向かつて、『一度、あそこ(南神村のカーリー神殿)に来る』とはつきり言っておきながら、いつまでたつても来ない。伝言もよこさない。こりゃあよくないことだね。真実を語ることが末法の世における修行だ』と言われているよ。真実さ(真実を語ることを粘り強く持ち続けなければ、きつと至聖をつかむことができる。真実さということにいい加減な気持ちでいると、だんだん人は墮落していく。わたしが今、何かの拍子に、『うんこをしに行く』と口走ってしまったら、もし、うんこが出たくななくても、尻洗いの水壺を手持ってジャウタラ(ジャウ樹の根元まで行かなくちやならん——真実さに対する熱意を失いたくないからね。わたしがこういう気持ちになつてからのことだが、大実母に花を供えてこうお願いして祈ったことがあるよ。ママー！ここに有るあんたの智と無智を取り除いて、わたしに純粹な信仰だけをおくれ。ママー！ここに有るあんたの善と不浄を取り除いて、わたしに純粹な信仰だけをおくれ。ママー！ここに有るあんたの善と悪とを取り除いて、わたしに純粹な信仰だけをおくれ。ママー！ここに有るあんたの徳と罪を取り除いて、わたし

に純粹な信仰だけをおくれ」ところが、この言葉は言えなかった——「マー！ ここにあるあんたの眞実サテイヤと不眞実アサテイヤを取り除いて」とはね。何もかもみんなマーに取り除いてもらつても、眞実サテイヤだけは、そうするわけにはいかなかったよ」

やがて、ブラフマ協会の方式にのつとつて礼拝の儀が始まった。壇上、正面の燭台にローソクが灯り、教師アージュリヤが席につく。開会のことばに続いて、教師は至高ブラフマンをお招きするために、ヴェーダにしろされた大眞言を唱えはじめた。会員たちは一斉に声をそろえて、この古代の先覚見神者たちの聖なる口で語られ清浄な舌からほとばしり出たことばを唱和する——「眞実にして無限の智慧なるブラフマン、永遠絶対の歓喜に輝き、平安、祝福、不二一元、清浄にしてすべての罪を消去するもの云々。オームのひびきに会員たちの胸はひとしく共鳴し溶けこんだ。多数の人びとの心は、ほとんどニルヴァーナニルヴァーナ涅槃といつてもよい状態になった。心は静まり、動かず、深い瞑想の境地であった。大方は目を閉じて！——ひととき、ヴェーダに述べられた全徳のブラフマンに想いを凝らしたのである。

大覚者パラマハムサ様も深い靈的境地に浸つておられる——不動の姿勢、動かぬ視線、沈黙。まるで、絵の中の人物のように坐つていらつしやる。魂の鳥は何処いずこへ楽しく飛び回っているのか、体だけ無感覺のままここに残して——。

(訳註) サテイヤ(眞実さ)——ヨーガの禁戒ヤマ、正直ニヤと同じ意味で使われていると思われる。サテイヤは眞実、眞理、誠実の意味もあるが、現実と一致するという意味があり、言ったことが実際に起こることがサテイヤである。

三味から戻られて目をひらいたタクールは、あたり四方を見回していらつしやる。皆が目を閉じているのをご覧になると、ブラフマン、ブラフマン、とつぶやきながら突然立ち上がられた。

礼拝が終わると、ブラフマ協会の会員たちは長太鼓とカルタル(小さいシンバル)の伴奏で讃神歌を始めた。聖ラーマクリシュナは神聖な愛に酔いしれた有様で皆といっしょに歌い、かつ踊られた。一同は吸いつけられたように、その何とも形容できぬほど魅惑的な踊りの身振りに、我を忘れて見とれている。ヴィジャイ・クリシュナ氏はじめ、相当数の会員たちが、タクールを囲むようにして踊っている。皆、この靈妙不可思議な光景に見とれ、讃神歌の調べに溶けこんで、しばし世間のことを忘れていた。このひとときは、ハリの甘露の蜜を飲んで、この世の楽しみなどのことはすっかり忘れ果てていた。俗世の快楽を苦いものと感じていた。

讃神歌キールタンが終わると、一同は席についた。タクールがどんなことをおっしゃるか皆聞きたいので、この御方をぐるりと取り囲んで席についた。

### 在家の人に対する教訓

集まったブラフマ協会員たちに向かって、その御方はお話しになる――

「無執着の心で社会生活をするのは、とてつもなく難しいことだ。プラタプがいつか、『先生、私どもはジャナカ王のようにいたします。ジャナカ王は無執着の心で世俗の生活をしていました』と言ったから、わたしは言つてきかせたよ――『心でそう思っただけで、誰がジャナカ王のようになれるもの

か！ ジヤナカ王はどんな苦行をして智慧を獲たと思うね。頭を曲げて逆立ちをしたりして、長年の間、ぞつとするようなきびしい苦行をしたあげく、世間に戻っていらつしゃつたのだよ」と。

じゃ、在家の人には救われる道はないのか？——ハイ、もちろんありますよ。何日か一人になつて静かなところで修行すること。一人で修行して、信仰を身につけて智慧をつかむことだ。そうしてから世間で暮らせばいいんだよ。一人で修行するときは世間から完全に離れて、妻も、息子も、娘も、父親、母親、兄弟姉妹、親戚、誰一人そばにおいてははいけない。私には誰もいない。神だけが私のすべてのすべてだ」と考えるんだよ。そして、心の底から泣いて、泣いて、智慧と信仰をお授け下さい」とあの御方に祈るんだよ。

何日、一人でそうしていればいいのかつて？ そりゃ、たった一日でもそうすれば、どんなにかいいかわかりやしない。三日ならなおさらいいし——。それぞれ都合をつけて十二日とか、一ヶ月とか、三ヶ月、一年でもそうするように努力することだ。智慧と信仰を獲たなら、世俗の生活をして、もう殆ど恐れるものはないさ。

手に油を塗つてからカントル（ジャックフルーツ）の実を割れば、ベタベタ汁がつかない。鬼ごっこ遊びをしていて鬼ババにさわられてしまえば、もう逃げまわる必要はない。一度、（触れたものは悉く金になるといふ）触り玉に触つて黄金になつておけば、そのあと千年も土の中に埋められていても、掘り出されたときはちゃんと黄金のままだ。

心は牛乳のようなもの——世間という水のなかに入れば牛乳と水は混ざつてしまふ。だから、牛

乳を静かなところに置いて、凝こらせてバターをとるのだ。静かな所で修行して、心という牛乳から智慧と信仰というバターをとりなさい。そうすれば、そのバターは世間の水に入れても楽々と浮いている——決して混ざったりしないよ。世間の水の上で、何の執着もなく呑気に泳いでいるのさ」

### ヴィジャイ・ゴースワミーの独居修行

ヴィジャイ・ゴースワミー氏は聖地ガヤーから帰ったばかりであった。彼はそこで、かなりの日数を一人で暮らし、修行者たちと交わっていた。いま彼は、赤土色の僧衣をまとっている。落ち着いた清すが々しい様子で、心はいつも自分の内奥を見つめているようなふうである。大覚者様のすぐ近くに頭を垂れて坐り、何か深く考えているような風情である。

ヴィジャイの方を眺め、眺め、大覚者様は彼におっしゃった。

「ヴィジャイ！ お前さん、居場所やどを決めたかい？

まあ聞けよ。二人の修行者があちこち旅をして、ある町に着いた。一人が口をポカンとあけながら町中の市場や店や家並みを見物していた。ちやうどその時、もう一人に会ったわけだよ。その人は聞いた。『君、呑気そうに口をあけて町を見物しているようだが、荷物は何処どこへやった？』はじめの修行者は答えた。『私は先ず最初に宿を決めて、荷物を全部置いて、その部屋にカギをかけて、そうしてから街へ出かけてきたんだ。いま気楽に、町の様子を視察しているところさ！』——だから、いまお前に、居場所やどを定めたかい」と聞いたんだよ。

(校長たちの方を向いて) 見ろ、ヴィジヤイの泉はいままで塞<sup>よぎ</sup>がっていたが、今度は口があいたよ

〔ヴィジヤイとシヴァナート——無私の行為——出家の欲望放下〕

ヴィジヤイに向かっておっしゃる——

「見ろ、シヴァナートは年中いんな面倒ごとに巻き込まれて大忙しだ。雑誌や新聞にモノを書かないやらならないし、そのほかにも滅多やたらに仕事がある。ああいう世間の仕事をしていると、気の休まるひまもないさね。悩みや心配ごとが、次から次へと寄ってくる。

シユリーマッド・バーガヴァタにこんなことがでている。アヴァドゥータは自分の二十四人の師<sup>グ</sup>のなかにトビを一羽いれていなすった。ある場所で漁夫が魚を獲っていると、一羽のトビが舞い降りてきて魚を一匹さらって飛び上がった。ところが、魚を見たカラスどもが千羽ほどもトビの後から追いかける。カーカーわめきながらしつこくトビを追い廻す。どっちの方角へ逃げてもトビの行く方へカラスの群れはついていく。南へ飛べば南へ、北へ逃げれば北へ、どこまでもどこまでもついていく。西へ行つても東へ飛んでも同じことだ。しまいには、もう何が何だかめくらめつぼうに逃げているうちに、トビの口から魚が落ちこちてしまった。そうしたらカラスは、トビを放っておいて魚の方に行ってしまった。トビはやっと息をついて一本の木の枝に止まって、ヤレヤレと胸を撫で下ろした。木の枝に止まって考えついた——あの魚が原因でこの災難が起こったんだなあ。今は魚がないから、おれはこの通り平和なんだ！



魚——つまり、欲を持っていてる間は仕事がついて廻って、そのために、悩み、心配、もめごとが追っかけてくるのだ、という教訓をアヴァドゥータはトビから得たわけだ。欲を捨てれば仕事がなくなり、平安が訪れる。

だが、無私の仕事(ニシユカマ・カルマ)はいいことだよ。それで心の平和が乱されることはないからね。だが、無私の仕事というものは途方もなく難しい。自分では無私の仕事をしてるつもりでいても、どこからともなく欲が忍び込んでるものだ。先に沢山修行をした人なら、どうやら無私の仕事ができる人もいるようだがね。神様にお会いした後なら、楽に無私の仕事ができる。見神の後では、大抵の場合仕事は離れてしまうものだが、なかに一人、二人は(ナーラタたち)、人々を導くために仕事をする」

〔修行者は蓄えず——愛が進めば仕事は離れる〕

「アヴァドゥータのもう一人の師匠グルは蜂はちだ。蜂は大変な苦勞をして何日もかかって蜜みつを集める。ところがその蜜は、蜂の楽しみとはならない。その上、誰か人間がやってきて、巢を壊して持って行ってしまう。アヴァドゥータは蜂から、蓄えるな」という教訓をもらった。修行者は十六アナ(100%の意味)を神に任せきっているのだから、ものを蓄えてはいけないのだ。

でもこれは、在家の人には当てはめられないよ。在家の人は家族を養わなければならないから、蓄えることも必要だ。鳥と修行者は貯めない。鳥でもヒナができると蓄える。——ヒナに食べさすために口ばしで食物を集めてもってくる。

なあ、ヴィジャイ、もし修行者と行き会って、<sup>ず</sup>頭陀袋や荷物や、十五もの結び目でしつかり結んだ衣類の包みなどを持ち歩いているようなら、そんな人は決して信用しちゃいけないよ（訳註——十五の結び目とは、その当時は衣の結び目に金を隠す習慣があり、それを暗示している）。わたしも五聖樹<sup>パンチャバタイ</sup>の杜のパニヤン樹のところ、そんな修行者がいるのを見かけたことがある。二、三人で坐っていたが、一人は豆をよっていたし、一人は着るものを縫っていた。そして、金持ちの家でもてなしてくれた時のことを、あれこれとうわさしていた。『ホー、あの旦那は十万里ピも使ったと、すごいねえ。修行者<sup>われわれ</sup>にも、プリヤジリピ、ベラ、バルフィー、マルポワなんかの菓子で、大変もてなしてくれたねえ』（一回笑う）（訳註——プリは揚げパン、ジリピはインド風かりんとう、ベラ、バルフィーはミルク菓子、マルポワはインド風パンケーキ）

ヴィジャイ「仰せの通りです。ガヤーでもそんな修行者を見かけました。ガヤーでは、<sup>ゞ</sup>水差し運びの修行者（ロタワラ・サードウ）<sup>ゞ</sup>といわれています」（一回笑う）

聖ラーマクリシュナ「なあ、ヴィジャイ、神に対する愛が進んでくると、自然に仕事の方から離れて行く。神様が仕事をおさせになるなら、その人たちは働けばいいんだ。お前さんはもういいよ。すべて放<sup>す</sup>下<sup>て</sup>で、<sup>ゞ</sup>心よ、お前とわたしだけ、ほかの誰にも見えぬもの<sup>ゞ</sup>とおいいよ」

こうおっしゃって、<sup>ゞ</sup>至尊<sup>バガヴァン</sup>、聖ラーマクリシュナは、あの又とない甘くやさしい声をふり注ぐようにして歌をおうたいになった——

胸に抱いた 大事な宝玉<sup>たから</sup>

いとしい母さま シャーマを見るのは  
心よ お前と私だけ  
ほかの誰にも見えぬもの

欲の惑<sup>まど</sup>わし さらりとすてて  
ひとり清らかな心で見よう  
でも 舌だけは残しておいて  
ときどき甘えて マー、マーと呼ぼう

いやな臭いや 味するものは  
そばに決して寄せつけぬよう  
智慧の眼 いつも光らせて  
油断をせずに気をつけていよう

そして又、ヴィジャイに向かつておっしゃる——  
「至<sup>かみ</sup>聖<sup>シヤラナーガ</sup>にすべてを任せきって、もう恥とか恐れとかをすっかり捨てておしまい。私がハリの名を唱えながら踊ったら、世間の人は何て言うだろう。なんていう気持ちはずっかり捨てておしまいよ」

〔恥、憎、怖〕

「恥ずかしい、憎らしい、怖ろしい——この三つがあつてはだめだ。恥、憎しみ、怖れ、階級カークラス、ウヌボレ、隠し立て、こういうものはみな、縛り縄だ。こういうものがなくなれば人は解脱できる。

縛られているのがジーヴァ（人間）で、縛られていないのがシヴァ（神）だよ！ 至聖カミへの愛——これは滅多に見られない代物だ。はじめのうちは、妻が夫に仕えるようなひたむきな気持ちを神に対して持つようにすれば信仰が身につく。純粹な信仰というものは、これまた大そう得がたいものだ。心も命も神に投げ入れてしまうことだからね。

その次はバーヴァ。バーヴァになると人は黙つてしまう。呼吸いいきが止まつてしまう。それで自然とクムバカ（正気）になる。鉄砲の引き金を引くとき、息を止めて物を言わなくなるのと同じようなものだ。聖愛プレムを身につけるとするのは先の話、一番難しいことだ。チャイタニヤデヒヤ様は愛をわがものとしなすつたがね。愛を持つと外界の物事は忘れてしまう。世界を忘れてしまうんだよ。この大切な馴染み深い自分の肉体のことまで忘れてしまうんだ」

「こうおっしゃって、大覚者様は再びお唱いになった。

ハリの名呼んで涙を流す

それはいつの日 いつなれる？

ハリの名呼んで欲みな消える

それはいつの日 いつなれる？

ハリの名呼んで体が震える

それはいつの日 いつなれる？

信仰者とクムバカ——靈氣が上がれば至聖を見る

このようにして会話がづづいていゝるときに、招待客と数人のブラフマ協会員が入つてきて席についた。そのなかには数人の学者と政府の高官が混じつていた。その中にラジヤニナート・ラーイ氏もいた。

タクルは、パーヴァの状態になると呼吸が止まるゝという話をしておられる。それから、アルジュナが矢の標的にした魚の目にねらいをつけていたとき、魚の目だけを視てほかのほうはおるか、魚の体のどの部分も見えていなかった。ただ、目だけに視線を集中していた。こういうときには呼吸が止まりクムバカになるのである、という話をなさり——

「神を見るときの特徴——内部から大きな靈氣の流れがモクモクと頭に向かつて上つてくるんだよ！ そのとき三昧に入れば至聖を見ることが出来る」

〔ただの学問は当てにならない——権力、富、名誉、地位、すべて虚仮〕

タクールは客の方をチラと見て——

「ただ学問だけして神への信仰のない連中の言うことは筋が通っていない。サマーデヤイーが言っていたが、或る学者がこう言ったそうだ。『神は無味乾燥なものであるから、君たちはよろしく自分の愛と信仰を彼に与えて、味わいのあるものに変えたまえ』と。ヴェーダであの御方のことを、甘美極まりなく味わい無限なる」と言っているのに、あの御方は無味乾燥だなどと言うんだからね！ そのことで、この人は神について何一つ知らない、ということをお白状したようなものさ。だから、こういう目茶苦茶なことを口にするんだよ。

ある人が、『私の叔父の家には牛舎に馬がたくさんいる』と言った。この言葉で、馬は一びきもない、ということがわかるだろう。馬を持っている人は、牛舎になど入れないからね（一同笑う）。

権力や富、社会的地位、名誉——そういったものを鼻にかけて威張る人がある。こんなものはみな、二日っきりのものだよ。どれ一ついっしょについてきてくれやしない——あの世に引越すときにはね。こんな歌があるさ——

心よ 考えてもごらん

誰一人 お前のものなんか いやしない

あわれなものよ

この仮の世を空しくさすらつて

幻の網に捕まっているのだから

母なるダクシナ・カーリーを忘れるな

ダクシナ・カーリー——右手を上げて、恐れるなと勇気を与えてくれる女神様

命かけて愛した妻も 死の時が来れば

お前について来ることはない

不吉なもののように

死骸から顔を背けるだろう

ご主人様と言って敬つてくれるのも

まあ、二、三日くらいのもよ

時々なる主が来れば すぐに

消え失せる命とも知らないで……

〔高慢の特効薬——上には上がある〕

「それから、金を持っているからって自惚れちゃいけない。私は金持ちだなどと云おうものなら、

その上、またその上の金持ちが現れる。日が暮れるとホテルが出てきて、私はこの世界を照らしている、と思い込んでいる！ だが、星が空に現れるとホテルの自惚れは引っ込んでしまう。すると、こんどは星が思う——私は世界を照らしているんだ！ だが、月が昇ると星たちは恥ずかしそうに瞬く。こんどは月が思う——私の光で世界は笑っている、私が世界を照らしていると。そうしているうちに東の空が赤みがかってきて、お日様がお昇りになる。月は色褪せて、やがて見えなくなる。

金持ちの人は、こんなふうに考えてみるんだね。そうすれば、自分の富に対する自惚れはおきなくなる」

大祭を祝うためにマニラルは豪勢な御馳走を用意していた。彼は、聖ラーマクリシュナをはじめ、すべての会員たちを心を込めてもてなした。皆がそれぞれの家に帰ったのはかなり夜が更けてからであったが、一人残らず満ち足りた気持ちだった。